

ひやひやどきどきなつなごや
～大相撲名古屋場所観戦雑記～

怪我続きの日馬富士、よちよち歩きが終わらない鶴竜、壁に阻まれたままの稀勢の里、大関陥落の危機の琴奨菊、相撲解説者ならずとも誰が予測しても白鵬の「独走による 30 回目の優勝達成」と読めた。ところが、後半に向かうにつれて……、おそらく集客効果につながったのではないかと思う。何人かの力士に光をあてて、この場所を振り返ってみることにした。

<1> 大横綱大鵬の記録は破られるかもしれない

白鵬の場所前のインタビューでのやりとりには、冷静ながらも「優勝 30 回達成」への決意が感じられた。相撲内容にも落ち着きと、相手の動きを見ながら対応する柔軟さが見えていた。11 日目の豪栄道戦、豪栄道が右四つ両まわしをがっちり握ったところから筋書きが始まった。白鵬はまわしを切ることも狙って反り身から体を回転させながらの上手投げに出た。ところが豪栄道は強い引き付けの上に体を預けてきたので、白鵬は腰砕けになってしまった。この上手投げは誰が見ても強引な投げだった。勝ちを焦る気持ちと、対戦力士を少々甘く見た油断が負けに繋がった。13 日目の稀勢の里戦は、「もうこれ以上は負けられない」という焦りの気持があったのではないか。この日まで 8 勝 4 敗と優勝争いから遙か遠くに脱落してしまい、どこかにトラブルを抱えていると思われる不安定な腰つきの大関に、差し手のみで思いっきり土俵際に持って行き、見事に逆転された。この二つの敗戦を見ると、白鵬の「優勝 30 回への思い入れ」とそれに伴う「焦り」とを読みとることができた。「白鵬も生身の人間」と思えば頷くことができるが……。「相撲道」という考え方に心を置く横綱、おそらく反省と精進を怠ることなく、大鵬の優勝 32 回という大記録は近いうちに破られるのは間違いないだろうと見ている。

<2> これでよかった琴奨菊

先場所負け越した琴奨菊は、今場所も負け越すと大関から陥落してしまう。とは言っても、特例があり、その次の場所で 10 勝以上できれば復帰することができる。つまり、今場所は 8 勝できれば地位保全にはなるし、よしんば負け越したとしても来場所 10 勝できれば良い訳だ。胸の筋肉を痛めてから復活が遅れており、おおかたの見方としてはこんな程度の読みだったに違いない。ところが、中日で勝ち越しができたことで気を良くしたのか、後半は白鵬・日馬富士に敗れはしたものの馬力が戻ってきた。そして、白鵬が負けたことで 14 日目には同点で並んでしまった。千秋楽に豪栄道に敗れて 12 勝 3 敗となり優勝決定戦にはならなかった。とはいえ、終盤の売り上げ拡大に貢献したことは事実。私の見方としては（少々偏見も入るかもしれないが）、優勝決定戦にならなくて良かったと思っている。もし白鵬と優勝決定戦をしようものなら「来場所綱取り」の騒ぎが起きるに違いない。カド番を繰り返したり、9 勝するのがやっとの大関に「綱取り」騒ぎはナンセンスだからだ。本当に実力があり安定した大関になったかどうかは、次の場所とその次の場所を見ればすぐにわかることだ。

<3> 新しい大関に期待しよう

初日嘉風にブッ飛ばされた豪栄道は、もたもたした不安定な土俵が続いた。前半を 6 勝 2 敗で切り抜けはしたものの、このままいくと今場所も千秋楽に勝ち越しになるかも……と思わせた。大砂嵐を上手くさばき、稀勢の里に完勝したあたりから少しずつ目の色が変わって来た。そして鶴竜・白鵬の両横綱に勝ったことで琴奨菊・高安とともに優勝戦線に浮上してきた。そして千秋楽、「勝てば大関昇進もあり」という協会の幹部の発言が火に油を注ぐ効果となった。私の見解としては、千秋楽が終わらぬうちに理事長ほか協会の幹部がこのようなことを公言するのは問題だと思う。千秋楽の対戦相手の琴奨菊からすれば、「相手が勝った場合だけの懸賞」を突然かけられたようなもので、不自然な上に失礼な話でもある。もっとも、新大関が誕生する前に新横綱が誕生してしまうと「四横綱一大関」という見っともない番付が出

来上がってしまうのに気がついた協会に「あせり」があったからではないかと思うが、考え過ぎだろうか。それはさておき、めでたき新大関誕生なのでひとこと私見で結ぶことにする。松鳳山と並んで「土俵上の表情」が好きな力士である。何か成し遂げられそうな「勝負師らしい毅然とした表情」が気に入っている。

<4> 尾車部屋の元気な二人

前述のように初日に嘉風が豪栄道に圧勝し、この場所の面白さが始まった。嘉風の相撲はきびきびとした動きで矢継ぎ早に手を繰り出す「一瞬も目を離すことができない」相撲で気持ちが良い。

四日目にやや不調とは言え横綱日馬富士を破る快挙を成し遂げ、「32歳の高齢初金星」と騒がれることになった。後味の良い勝敗を越えた面白さがある相撲は称賛に値するが、残念ながら7勝8敗に終わった。

ところが、9日目に大事件が発生。同じ尾車部屋の兄弟子豪風（35歳）も日馬富士を破り、「高齢初金星」の記録はあっという間に塗りかえられてしまった。豪風の相撲は鋭い立ち合いからの突き押しがあるかと思えば、突然の叩きやいなしもあるが、四つ相撲では殆ど勝ち目がない。前頭4枚目という難しい地位で9勝6敗、今場所の三役陣の成績と動きをみると、来場所は一気に関脇まで跳ね上がる可能性も出てきた。

<5> トンネルを抜けたらカンフル剤

長い長いトンネルを抜け出した高安の相撲は初日から光っていた。高安らしい速さと力強さと臨機応変の巧さが戻り、中日まで8勝無敗。後半戦で上位の力士に当てられて潰された感があるが、中盤まで優勝争いの輪の中に入って11勝4敗の成績で敢闘賞も得た。前頭11枚目まで下がったら、実力からすれば当然と言う方もいるようだが、まずは評価すべきだろう。そして、上位に戻って「昔の高安」が見られる日を楽しみにしたいと思う。同じ田子の浦部屋の大関稀勢の里が少々くすぶって来たので、部屋のカンフル剤にもなると良いなと思う。

<6> 若手を壁が育てる

西前頭5枚目遠藤と西前頭3枚目大砂嵐は色々比較されることが多いが、極端に異なるタイプの力士である。かたや「基本に忠実な緻密な技の相撲」、こなた「論理は無視した粗雑な力相撲」。どちらも先輩力士達に十分に研究されてしまい、今場所は思い通りに行かないことが多かった。

前半戦を3勝5敗で終わった遠藤の相撲には「方針」もなく「勢い」もない感じだった。勢いよく突進してくる力士にはことごとく痛めつけられていたが、自分の踏み込みが甘いからだだった。受け身や流れに任せた相撲では幕内では通じる筈がない。低く鋭く突っ込んで前みつを取る形が戻って来るにつれて少しずつ星を戻し、千秋楽に辛うじての勝ち越しとなった。

大砂嵐の、やや下がり気味の位置からの立ち合いの強いからあげで何人かの犠牲者が出たが、相手との距離や顔の位置や立ち合いのテンポなどによっては有効にはならない。さらに勝ちあげの動作でがら空きになった胸元に相手力士が入りやすいので、「からあげは危険な道具」と言われているがその通りだった。

強い引き付けという武器があるので、顎を引いて腰を落として脇を固めて行けば四つ相撲の強い力士になれる可能性がある。壁にぶつかって7勝8敗に終わったこの場所、来場所に向けて改善ができれば良いが。

<7> 後ろ姿が好きなんだ

久しぶりに、きれいでうまい妙義龍の相撲が復活した。低い腰の構えと前に落ちない安定した姿勢、鋭い押し相撲と差し手と前みつが活きた素早い四つ相撲。現在の幕内力士の中では数少ない存在である。前頭6枚目まで落ちれば11勝4敗は当然の出来映えかもしれないが、来場所から元の地位（関脇）への復帰を目指して「妙義龍らしい相撲」を見せ続けてもらいたい。白鵬と並んで後ろ姿が美しい力士である。

<8> またまた蒙古大襲来

照国と東富士の再来と騒がれた照ノ富士は、三月場所で入幕して今場所は前頭6枚目。力相撲も技相撲もこなせる上に腰が重くて懐が深い。毎場所少しずつ進歩を積み上げている感じで、この場所も9勝6敗。

ベテラン力士のような落ち着いた土俵上の態度も大物をうかがわせる。来場所親友巻くが予想される十両の逸ノ城とともに恐るべきモンゴル出身力士になるかもしれない。

<9> 古い奴だと思いでしょが・・・

新しい力の台頭、新しい風の可能性が見えてきた相撲界。一方ではベテラン力士の活躍も顕著である。

9月に40歳になる旭天鵬と場所前に38歳になった若の里は、初土俵平成4年3月場所の同期力士。

怪我で十両に落ちていた若の里は今場所再入幕を果たしたが、東前頭 16 枚目で幕尻に一枚しかない。奮闘努力の甲斐なく 5 勝 10 敗に終わり、再び十両に陥落することになってしまった。

旭天鵬は東前頭 12 枚目、幕尻まで十分に余裕はあるものの 6 勝 9 敗という結果。この二人が対戦した 14 日目の土俵は迫力があつた。39 歳と 38 歳の対決は手に汗を握る四つ身の力相撲で、若の里に軍配があがつたが旭天鵬はこの一戦で負け越しが決まった。両力士ともさらに長く相撲が取れることを祈りたい。

<10> 目を背けたくくなるような

怪我がもつて十両まで落ちて、それでも時間をかけて復活を期してきた豊真将、今場所は前頭 2 枚目まで番付を戻した。初日・二日目の相撲を見る限り「豊真将が戻って来たな」という印象だったが……。

5 日目の日馬富士戦、横綱に対してかなり善戦したが、土俵上に倒された時に折り曲げた膝の上へ日馬富士が乗りかかるような形になった。テレビ画面で見ても「これは間違いなく靭帯損傷か断裂だろう」とわかるような折れ曲がり方だった。一般人から見れば図太い頑丈な足であっても、軽量とは言え 135Kg の体重がかかってはひとたまりもない。再び十両もしくはそれ以下に陥落することは間違いなだらう。

東龍、7 勝 6 敗で勝ち越しをかけた 14 日目、次代のホープと期待の大きい十両の逸ノ城が対戦相手。土俵中央で浴びせ倒された東龍の上へ 186Kg の逸ノ城巨体がドスン。その瞬間東龍の歪んだ表情がテレビ画面に映ったが、目をそむけたくくなるようなシーンだった。

かくして、二人の力士が同じような事故の犠牲になってしまった。

<11> 相撲協会への提言

相撲の勝負は、行事と審判が見守ることで行われており、決定権は行司が持ち複数の審判と控え力士がこれを監査をしている。表面的には公正に行われているように見えるが、局面次第では観客が理解・納得できない結果になることもある。

熱戦の最中に足が出た取り組みがあつた。審判が「勝負あり」の手を上げ、行司がこれを確認して両力士に「勝負あり」を告げ、軍配を上げて勝負が終わつた。テレビの放送ではすぐにスローモーションビデオが映し出されて、テレビ機材では納得できる。しかしながら熱戦の最中に突然戦いが終わってしまったため、会場の観客には何が起きたのかさっぱりわからない。会場がしばしざわつく中で勝ち名乗りが済み、何事もなかったかのように次の呼び出しに入ってしまう。

毎場所一番ぐらいこういう場面を見るが、「審判長から観客への説明」があつてしかるべきだと思う。また会場に大型ディスプレイを設置して、物言いがつた場合や説明が必要な事態が起きた場合などに活用したらより透明性が高くなると思うが、どうだろうか？

以上